

太田忠司



TOKUMA NOVELS 書下し長篇 本格推理

天霧家事件





TOKUMA NOVELS

太田忠司

天霧家事件

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ二ノ一六 郵便番号一〇五・五五

電話三五七三・〇一一一

振替〇〇一四〇〇・四四三九二

©Tadashi Ota 1995

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 吉川和利〉

ISBN4-19-850228-5

太田忠司

TOKUMA NOVELS

書下し長篇本格推理

天霧家事件





ISBN4-19-850228-5

C0293 P780E (0)

定価=780円(本体=757円)



1910293007800



あまぎりけいけん
天霧家事件
おおただし
太田忠司

狩野俊介と野上英太郎の石神探偵事務所・推理シリーズも本書で七冊目。これまでは俊介の活躍が中心だったが、読者の強い要望もあり、本作品で初めて野上英太郎の名推理が発揮された。事件はまたまた奇妙きてれつ。野上探偵との推理合戦をお楽しみあれ。

TOKUMA NOVELS



書下し長篇本格推理

天霧家事件

太田忠司



徳間書店

TOKUMA NOVELS

天霧家事件 目次

序 章

9

第一章 黒衣の依頼人

11

第二章 調査開始

26

第三章 幻の夫人

40

第四章 古い写真帳の中に

53

第五章 夕暮れの喫茶店で

63

第六章 依頼人の正体

72

第七章 深まる容疑

85

第八章 天霧家の女

97

第九章 錯綜する欲望

111

第十章 誘惑と脅迫

122

第十一章 十六年前の強盗殺人

137

第十二章 山の麓の別荘で

150

第十三章 血塗られた天使

163

第十四章 叔父と甥の確執

173

第十五章 手品のからくり

186

第十六章 忌むべき真相

199

第十七章 天霧家の秘密

212

終章

227

あとがき

231

本文挿画・末次徹朗

序章

石神さん——。

私は今、少々悩んでいるところだ。

何かとびきりの事件が起きたなら、その顛末^{てんまつ}を必ず報告すると石神さんに約束していたよね。だからこれまでも、特筆すべき事件は細大洩^もらさず書き記して送ってきた。

しかし今回の事件ばかりは、そうするべきかどうか迷っている。

つまらない事件というわけではない。それどころか、ある意味ではこれほど特異な事件もないだろう。

石神さんの興味をおおいに駆り立てる物語だ。

にもかかわらず、こんなに躊躇^{ちゅうちよ}しているのは、

ひとつには事件の背景となった人間の心の奇怪さに私自身が打ちのめされてしまつて、いまだに立ち直れないでいるせいもある。

そしてもうひとつは——こちらのほうが問題なのだが——この事件の隠れた事実を、俊介に知られたくないからでもあるのだ。

今回の事件に、俊介は直接関つてはいない。彼が留守をしている間に、私ひとりで調査にあたつたものだ。最近では俊介の推理力に頼ることが多かったのだ、結構苦勞させられたよ。おかげで随分な回り道をしてしまったような気がする。

しかし後になつて考えてみれば、これは幸運なこ

とだつたに違いない。私は今、つくづく俊介がこの事件に携わらなくてよかつたと思つてゐる。

もちろん、このような事件が起きたこと自体は、俊介にも話してある。しかし事件の根幹をなすある事実については、あえて伏せておいた。過保護かもしれないが、俊介にはまだ、こんな事件に關つてほしくはないのだ。

これまでの事件で俊介は、人間が内に孕む闇に何度も逢着してきた。ほうちやくそしてそのたびに彼は深く傷つきながらも、なんとか克服してきた。

だが今度の事件だけは、俊介にはまだ早い。そう思うのだ。

だから石神さん、私がこれから書き綴る物語のこ
とを、俊介に明かすことはしないほしい。できれば読後焼却して、捨ててもらいたい。

読み終えた後、私の危惧きぐをなると納得しても
らえるか、野上は大袈裟おおげさすぎると一笑されてしまふ

か、それはわからない。

しかし今の私は、石神さんにそう願ひしたい氣
持ちで一杯なのだ。

さて、もったいぶつた前口上はこれくらいにして
おこうか。

まずは夏休みも終わろうとする朝、俊介が出かけ
ようとしている場面から、話を始めよう――。

第一章 黒衣の依頼人

「早くしないとおいでくわよ」

美樹がぷりぷりしながら睨みつけている。

「大丈夫？ 忘れ物はない？」

アキが大きな鞆かばんを手渡ししながら、声をかける。

「う、うん……」

あたふたと自分のポケットを探りながら、俊介はどちらに答えたのかよくわからないような返事をした。

「ねえ狩野君？」

「俊介君？」

「大丈夫だよ。うん大丈夫」

俊介は自信なさそうに頷いた。

「よし、行くよジャンヌ」

声をかけると、ジャンヌは鞆を踏み台にして飛び上がり、俊介の肩に乗った。

「じゃ野上さん、行ってきます」

「ああ、行っておいで。気をつけてな」

「はい。あの、もし僕がいない間に何かあったら……」

「そんなこと、野上さんに任せておけばいいの。それより早く！」

美樹に半ば引きずられるようにして俊介は事務所を出ていった。扉が閉まると一瞬にして静寂が訪れる。

私は思わず溜息をついた。

「やれやれ……まるで台風が通りすぎたような感じだな」

「お疲れさま。お茶でも淹れるわね」

アキは私の肩を叩くと、湯沸室に向かった。

「店のほうはいいのかい？」

私が声をかけると、アキはふりむきもせず、

「店長に任せてるから大丈夫。あたしが二、三時間、

いなくらいで潰れるようなお店じゃないしね」

と、いたって暢気なことを言いながら、ドアの向

こうに姿を消した。

「店長も大変だな……」

私は、もう一度溜息をつかないではいられなかつた。

その日は夏休みの最後の月曜日だったが、俊介は

同級生の美樹や久野君たちと、久野君の家の別荘に

三泊四日で出かけることになっていた。

私との約束を守るため、俊介は前夜まで夏休みの

宿題を済ませようと必死に頑張っていた。なんとか

宿題のほうは終わらせたのだが、肝心の出かける準備

を忘れていたので、たった今までアキに手伝って

もらいながら大急ぎで仕度をしていたというわけなの

だ。

やがてアキが紅茶を持って戻ってきた。

「お、ありがとう」

私はアキからカップを受け取り、香りを楽しみな

がらゆつくりと飲んだ。

「野上さんも一緒に行けばよかったのに」

アキは長椅子に腰を降ろすと、自分の紅茶を一口

飲んでから言った。

「そうはいかんよ。仕事があるんだから」

私が反論すると、

「へえ、どんな仕事？」

と、即座に切り返してきた。

「それは……」

私は答えに詰まってしまった。

「今はちょうど暇になっていているが……しかしね、いつなるとき依頼者がやってくるかわからないんだし……」

言葉尻に力がなかったのは、本当に依頼者がやってくるのかどうか、自分でも自信がなかったからだ。「ねえ、真面目な話、もうちょっと俊介君と遊んであげてもいいんじゃない？」

アキは私が怯んだのを見抜いたのか、さらに追い撃ちをかけてきた。

「夏休みの間、全然どこにも行かなかったじゃない。やっぱどこかに連れて行ってあげなきゃ」

「行つたじゃないか。玄武塔に」

「あれは……あたしが頼んだお仕事でしょ。そうじゃなくて——」

「わかってるさ」

私はアキが言い募ろうとするのを、掌で押しとどめた。

「たしかに親代わりとしては、俊介ともう少し遊んだほうがいいだろうとは思っているよ。だが、俊介自身がそれを拒否してるんでね」

「野上さんと遊ぶことを？」

「そういう言われかたをすると、まるで私が嫌われているみたいだが」

私は思わず苦笑してしまった。

「実際の話、海にでも行こうかと何度も誘ったんだ。だが俊介は行きたくないと言った。正確に言えば、私の仕事を妨げてまで行きたくはない、とね」

「なるほど……俊介君らしい言いかたね」

アキも苦笑する。

「だから今度の話は渡りに船だったんだよ。友達となら俊介も気兼ねなく出かけられるし」

「野上さんとしても、俊介君が積極的に同年代の友

達とつきあう機会ができて安心できるしね」

私はそれには答えなかったが、アキの言葉は凶星を差していた。

「でも、久しぶりに野上さん、ひとりつきりね。寂しくない？」

「寂しいもんか。俊介がやってくるまで、私は何年もひとり暮らしをしてきたんだからね。それにただか四日のことじゃないか」

「そんなこと言って。本心を言いなさいよ。寂しいんでしょ？」

アキの追及は妙にしつこかった。

「アキ、何が言いたいんだ？」

「別に。ただ野上さんがどうしてもって言うなら、しばらく事務所にいてあげようかなって思っただけよ」

「おいおい、『紅梅』のほうはどうなるんだ？　ずっと店長ひとりきりにできないだろうが」

これには私も呆れてしまった。たしかにアキは私が石神探偵事務所の非常勤所員という扱いになっているが、本業は喫茶「紅梅」の看板娘なのだ。私の仕事を手伝うときも、あくまで喫茶店の仕事を優先することを条件にしている。

「お店のほうなら店長に任せて——」

「それは駄目だ」

私は少しだけ語気を強くした。

「いいかね、いつもいつも店長に仕事を押しつけて私の所にばかり入り浸っていられると、私のほうが店長に申しわけが立たなくなる。店長は温厚なひとだから表立って文句は言わないだろうが、それだけに迷惑をかけたくはない。わかるだろう？」

「……そうね、わかったわ」

アキはさすがにしゅんとなった。

「でも、誤解しないでね。あたし『紅梅』の仕事を軽く見てるわけじゃないのよ。あっちのほうも大事

